

JOMA通信



Japan Overseas Missions Association 海外宣教連絡協力会 公報 No. 77号



(家族と共に)

日本イエス・キリスト教団事務局長
2016年度 JOMA 副会長
長田栄一

異文化の地に遣わされる 宣教師のために

キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。

ピリピ人への手紙 2 章 6-8 節

少し前まで JOMA との関わりのほとんどなかった者が、何の巡りあわせか、副会長をさせて頂くことになりました。所属する教団の中では、事務局での奉仕をしており、教団派遣の宣教師との関わりも主に事務的な方面のことに限られています。戸惑いつつも、自分にできる方面で関わらせて頂いております。

とは言え、個人的には宣教師との関わりがないわけではなく、むしろ大きな関わりがあるとも言えます。と言いますのも、生涯の伴侶として導かれたのが、OMF の短期宣教師として日本での働きをしている女性だったからです。

家内は、韓国の地から、当時私が住んでいた函館の隣町、七飯町の教会へ、短期宣教師として来日し、奉仕をしていました。超教派の集いで知り合う中、導かれて結婚に至りました。

今は当たり前のように(?)、夫婦として歩んでいますが、ふと「当たり前のことではない」と思い起こさせられる時があります。母国語が違います。食文化も、いろいろな生活習慣も違います。教会文化(とでも呼んだらよいでしょうか)も大いに違ってきます。色々な違いを乗

り越えて、地味な日本の一牧師を支える牧師夫人として、一日本人として(5年前帰化しました)、日々暮らしている彼女の姿を見て、「宣教師ってすごいな」と思うことがあります。

「天と地ほどの差がある」という表現があります。御子イエス様は、文字通り、天における栄光の座から離れ、地に下り、十字架の死にまで至ってくださいました。世界宣教の働きは、イエス様の次のようなお言葉から始まったと言えます。「父がわたしを遣わしたように、わたしもあなたがたを遣わします。」(ヨハネ 20 章 21 節)とするならば、この働きは、「自分の場」を離れ、遣わされる地に赴き、天と地ほどの差も乗り越え(どちらが天ということではなく)、その地に住み込むことなしには前進しないと言えるのではないのでしょうか。比喩的な意味ではすべての宣教の働きにそのような側面が伴いますが、異文化宣教の働きでは特にそういった側面が前面に出てきます。

神様からの召しによって、異文化の地で働きに遣わされている宣教師の方々の働きのため、私たちも同じ思いをもって、背後にある支援の働きを続けさせて頂きたい思います。

JOMA 世界宣教セミナー 2016「みんなでミッションー多様化する世界宣教」が2016年7月17日(日)午後から18日(月)にかけて東京駒込の中央聖書神学校を会場に開催されました。JOMAとしては2007年以来的宣教セミナーでした。二日間で延べ250人ほどの参加者が集いましたが、参加者アンケートからはそれぞれが新たなチャレンジを受けたことが分かる、祝福に満ちたセミナーでした。

プログラムは、主講師の鎌野直人師(関西聖書神学校学監・日本イエス・キリスト教団神戸中央教会協力牧師)による二度の説教、説教後の小グループの交わり、5つの分科会とパネルディスカッションに加え、二日目の昼食時に、「ランチタイムに異文化交流」を行いました。

Session1



メッセンジャー
鎌野直人師

主講師の鎌野師は、一日目は創世記12章1-3節より「**十字路に発/立つ**」と題して語られました。宣教とは「わたしが考えて、行う」ものではなく、「神がすでに始めておられる宣教」に参画することである。主はアブラハムにカナンに向けて旅立つように命じられた。それはすべての民族を祝福するための旅であり、安住の地を離れる旅であった。カナンの地は当時の交通の要所(十字路)であったが、そこでアブラハムは自分の弱さを知り、同時に、神は彼を通して祝福を残された。私たちが旅立つのは、成功のためではなく、祝福のためであり、それは十字架の道である。世は十字架(苦難)を避けるが、宣教は十字架(苦難)の中で進む。自分が変わること、傷つけられることを恐れては十字路に発つ/立つことはできない。あなたは神の「十字路に発て、十字路に立て」という招きにどう応えるか、とチャレンジされました。

Session2

二日目は2コリント5章17-21節より「**神の義となる**」と題して語られました。神は世界を素晴らしく創造され、人を神のかたちに創造され、人が神の代理人として地を治め祝福といのちを満たす使命を与えた。しかし、人は罪を犯し、神からの使命を果たすことができなくなった。しかし、そのような私たちを神は見捨てず救おうとされ、洪水から救い出したノアとその一家と神は契約を結ばれた。それは、「神の献身」、「神の義」と呼ぶことができる。世界に対する献身のクライマックスとして、神はキリストを世に送られた。キリストを通して新しくされた者たちが、もう一度地に祝福といのちを満たすために、新しい創造として、神の義として歩む。キリスト者は神の和解の福音を知らせ、生きる。福音を語ることと福音を生きることは切り離すことができない。神の義の物語の中で、あなたは生かされていくと、献身の招きをされました。



小グループディスカッション

Section Meetings

分科会では、「**異文化の地での教会開拓・形成**」をタンザニアのインド系民族の中で教会形成をしている安川圭吾師が担当しました。文化の壁を越えることができたのは、人々の生活に働く聖霊のみわざによることだったと語られました。また、日本ウィクリフ聖書翻訳協会宣教師の塚田真理子師は、「**未伝民族と聖書翻訳**」ー使徒の時代と現代の宣教から考えるーという題で語られました。聖書から神の宣教のわざには既成概念にとらわれない発想があったことを指摘され、聖書翻訳宣教の現地レポートを通して、今の時代に私たちが担っている宣教の働きにどう関わることができるかを語られました。「**職業を生かして**」の分科会では、グレイスハウス代表の石原和恵姉が海外駐在の経験を通して与えられたビジョンを、シェアハウスを運営するかたちで実現し、主の宣教に仕えている姿を証されました。また、「**異文化の地での人材育成**」の分科会では、声なき者の友の輪の柳沢美登里姉が、聖書のイエスの姿から教えられつつ、アジアでの抑圧された人々への支援



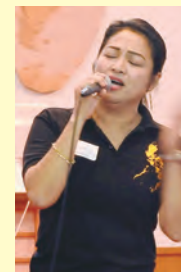
活動の体験を語られました。さらに「**留学・ワーホリ・海外駐在**」の分科会では、商社を退職し、現在神学校で学んでいる下村明矢兄が中国で駐在員として過ごした経験を通して、社会の現場での宣教の重要性・可能性を語られ、特に海外駐在員を教会は祈りつつ、サポートする必要があると強調しました。また、高田真希姉は自身のカリブ海の小島でのJICAボランティアの経験や帰国後の養護施設での働きを通して、主が私に行わせたいことは何か、を求めることの大切さを学んだと語られました。

Cross-cultural Exchange

「異文化交流プログラム」では、在日外国人クリスチ안의教会の協力をいただいて、2日目の昼食時に華人、ミャンマー人、フィリピン人、パルー人のグループが来訪し、それぞれ自己紹介、賛美、証、祈祷課題を分かち合っていました。また、会場後方のブースにその国のデザートや民芸品などを並べて下さり、短い時間ですがセミナー参加者と交わる時を持ちました。色鮮やかな民族衣装や珍しい楽器、各国の言葉での賛美、不可能と思われた中から主の恵みで人生が180度変えられた証など、言語も文化も信仰表現も異なりながら、同じイエス様を主として崇める兄弟姉妹たちのプレゼンテーションに、メッセージやディスカッション、分科会等の知性的刺激とはまた違う感性への刺激、「世界宣教の多様性」を五感でとらえる機会でした。



世界宣教、異文化宣教の現場は、今や私たちの目の前にある時代です。多くの日本人もその他の国々の人も、留学や仕事、結婚等で異文化へ動きそこへ留るのですが、キリスト者は、移動していった先での主の



働きへ、その地にいる同文化・同言語の人々だけでなく、自分にとっての異文化・異言語の人たちへの宣教に用いられる事も、主のみ心かもしれません。日本の既存の教会と外国語教会との実際的協力は簡単ではないかもしれませんが、相互の交わりを深め、祈りつつ何かの形で日本人への宣教にも在日外国人への宣教にも労を共にする道が開かれれば、いや開かれるのではないかと、主に期待します。

Panel

プログラムの最後に、「世界宣教とは何かー私のBefore & Now」と題して、分科会講師の方々がパネリストとして発言する機会を持ちました。パネリスト5人のうち宣教師2人（安川師、塚田師）、元駐在員（下村兄、石原姉）、宣教団体のスタッフ（柳沢姉）という面々で、宣教に携わるようになった時(Before)と現在(Now)の違いを、一人ずつ語ってもらいました。それぞれの宣教の現場で、それまで学んできた宣教の概念と現実の違い、日々の生活で直面する様々な葛藤の中で、それぞれがパラダイムシフトを経験してきたことが分かち合われました。それぞれが、Beforeのまま立ち止まるどころか、より深く、より広くNowの宣教に喜びを持って携わっていました。また進行役から投げかけられた「あなたにとって宣教って何ですか？」の問いに、「隣の人」、「イエス様の生き方をする」、「神の協力者」、「神の国の到来」、「自分自身の内なる人の変革」、もう一つの質問「宣教師って何ですか？」には、「隣の人に福音を伝える人」、「神の願っておられる回復と生き方を表す人」、「何でも屋さん」、「教会から送り出されて遣わされている人」、「みことばを解き明かし、神のわざをなす専門家」という示唆に富んだ答えが返ってきました。多様な宣教のあり方を通して、それぞれにチャレンジを受けたひと時でした。



セミナー参加者からのアンケートからもそれぞれが新たな視野が開かれ、自らの宣教のあり方を考え直すセミナーであったことが分かります。できれば、毎年このようなセミナーを開催してほしいという要望もかなりありました。皆さまのお祈りを心から感謝します。

(JOMA 世界宣教セミナー実行委員会)

クリストファー・J・H・ライト 著

『神の宣教 第1巻

—聖書の壮大な物語を読み解く—

(東京ミッション研究所選書シリーズ)

東京ミッション研究所 2,800円 + 税

判型：A5/ 296 頁

ISBN：978-4-264-03058-4



『神の宣教』は、原著 (The Mission of God: Unlocking the Bible's Grand Narrative) では、第四部までである大著で、581 頁にもおよびます。ですから、最初の約三分の一にあたる原著の第一部と第二部が、日本語の第1巻となっています。

著者のクリストファー・ライト氏は、1947 年に北アイルランドのベルファストで、宣教師家庭の息子としてうまれました。長老派の信仰的伝統の中で育てられました。ケンブリッジ大学で旧約を学び、それは後に God's People in God's Land (Eerdmans / Paternoster, 1990) として出版されています。本書の基本となる書物です。英国聖公会の教職按手札を受け、副牧師としてケント州トブリッジの教会で奉仕したのち、1983 年より家族と共にインドに渡り、プネにある Union Biblical Seminary で旧約を教えながら、5 年間インドで宣教の働きに従事します。それから、英国のオール・ネイションズ・クリスチャン・カレッジで教え、1993 年には学長に就任します。その後、2001 年より、ランガム・パートナーシップ・インターナショナルの所長に就任しさらに、2005 年から、ローザンヌ世界宣教会議の神学委員長に抜擢されました。2010 年、南アフリカのケープタウンで採決された『ケープタウン決意表明』(Cape Town Commitment) は、彼がまとめたものです。

本書は、そのローザンヌの精神の聖書的な基礎となるもので、是非多くの方に読んでいただきたいと願っています。第一巻は、まず聖書をどう理解し解釈するかということから始まっています。そもそも、聖書を解釈する際、歴史的批評的研究の成果を踏まえた様々な方法が出回っていますが、ライトはそれらを拒絶するのではなく、それらを批判的に乗り越

えて、より「一貫性」のある聖書の読み方を提示します。それが、「宣教的聖書解釈」という方法論です。具体的には、旧新約全巻を通じて描き出される、いわゆるメタナラティブから聖書を読むという読み方です。ここで言うメタナラティブとは、「神ご自身が被造物との関係を回復するために、まずイスラエルの民を選び、神の民として救いの業を始められ、それをイエスにおいて完成し、イエスにつく民を世界に派遣することをもってその業を完成に向かわしめる」という、聖書全体を通して語られている神の行動の全貌をまとめた内容なのです。それは、人々が聖書を読み、理解し、そこから意味を引き出すときに無意識の内に解釈の枠組みとして想定する物語のことです。その内容を一言で言うなら The Mission of God すなわち「神の宣教」(神の使命) となります。そして、その表現が、本書のタイトルとなっているのです。しかも、その副タイトル「聖書の壮大な物語を読み解く」は、まさにそのような読み方で本書が描かれていることを表わしています。

1～2 章では、こうした基本的な聖書へのアプローチが解明されます。そして、具体的な内容にはいっていきます。第3章では、民を選び派遣する「神」に焦点を当てられ、第4章では、神から派遣された主なるイエス・キリスト、そして第5章では、真の神と偶像崇拜についての議論が展開されています。

本書の残りの2巻、3巻は、近々出版されることになっているが、是非全体をセットで読まれることを勧めます。それによって、私たちがなぜ選ばれ、あがなわれ、福音を委ねられているのかに目が開かれるからです。今後、あらゆるクリスチャンが読み、自分がどのような存在なのかに目が開かれる本として注目されることを信じています。

AFJ ジャパン（アジア・フォー・ジーザス・ジャパン）

- ▶各宣教師の支援態勢が充実するように。特にフィールドコーディネーターの佐藤宣教師家族が支えられるように。
- ▶下山宣教師の新しい働きが祝福されるように
- ▶平岡宣教師の高齢者向けミニストリーが拡大していくように
- ▶鈴木宣教師の少数民族ミニストリーが祝福されるように
- ▶ AFJ ジャパン委員会と事務局を通して、中国宣教の現状が、日本全国の諸教会に理解されるように
- ▶新しい宣教師候補が与えられるように

基督兄弟団海外宣教委員会

- ▶教会の使命は世界宣教であることに教団内の各教会が関心を持ち、共通した理解と献身ができるように。
- ▶そのために各教区で毎年なされている「世界宣教セミナー」が継続・充実し、すべての人が主から動機づけられ、使命感を持つことができるように。
- ▶いつでも世界宣教のために具体的に派遣される人が起こされたときのために準備ができるように。
- ▶他の団体と共に課題を負い、協力していけるように。

在欧日本人宣教会

- ▶在欧日本人宣教会がミュンヘンに派遣している安藤廣之・里佳子宣教師家族のために。不穏な情勢の中であって主の平安の内に、宣教の働きを継続することができるように。
- ▶安藤宣教師夫妻が担っているミュンヘン日本語キリスト教会が2017年ドイツで行われる第34回ヨーロッパ・キリストの集いの企画担当教会となっています。良き準備ができるように。
- ▶在欧日本人宣教会の組織が主の御心に沿って活性化され、主の宣教の業にさらに豊かに貢献してゆけるように。
- ▶ BridgeBuilder（恵みの橋渡し役）が各地に与えられ、良きネットワークの中で帰国者のケアと欧州へ出掛ける方々のケアを豊かに、一人一人の魂が救いにまた霊の豊かな成長に与えられるように。

チャーチ・オブ・ゴッド国外宣教部

- ▶治安の悪いメキシコにあって阿部和子宣教師とスタッフが、あらゆる点で守られるように。高橋京太宣教師と家族が守られ、その働きが用いられるように。国外宣教部が両宣教師にいつも適切なサポートをしていけるように。
- ▶国外宣教のビジョンが若い方々、新しく教会に加えられた方々にも受け継がれていくように。
- ▶宣教師、ワーカーとして召される方が興されるように。
- ▶今年も主が私たちに祝してくださり、国外への重荷が与えられ、祈りとささげものが豊かにされるように。
- ▶グアダハラ教会の独立について検討を始めています。主の確かな導きが与えられるように。

